



百人一首集





ふりて紙をみりては思ふはえり
金峯山へこれ美室の池なり
いへう藤太ねえりてをきく
ふりて紙をみりては思ふはえり

まゝ
仙傳を
まゝ
まゝ
まゝ

新羅の
和州の
和州の
和州の
和州の

上を云つて人に
 せん仙かといふ祇
 女の方を云うと
 いふもあつて
 戒をたりあをまふ
 ちをいそはむふ
 れをいけりといふ
 校規いそふ家と
 とあつて金峯
 せんのかんとせ
 ういふせん
 として中
 うふふとある

[illegible]

同系

と雲現る
さあにほひ
とせむふの
わきくはて
たけとて
とせむふ
素て
の
え
す



五、後方白蠟條

新いものゝ花にうゑ
 とのめし種をうゑせ
 ともやうにうゑるもの
 万葉集のうゑの
 とはうゑのうゑ
 一葉のうゑのうゑ
 世のうゑのうゑ
 うゑのうゑ
 一葉のうゑのうゑ
 うゑのうゑ
 一葉のうゑのうゑ
 うゑのうゑ



和歌二聖人奇

掃部丸

橘花子

あはきり
雪のふりて
うきうき

いささか
春の端々

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十



繪馬のうし



目錄

[illegible]

いふに、はりてくちやうと
いふも、女中といふの如くぞ
女のてんたに辨こひをば
ゆに粧をする辨こひやは
だれなるものかといふは
あらざるなり。まづ
人の女中よりあつたれば
下等とみえしむるをば
いふ人との言へり。



御免を蒙りて
お返しに

[illegible]

三十六

久松

卷之六

何
系中

白雲

神奈川縣

大 地 野 之

白雲

時五

卷之五



進物箱曲えりものの様ように付仕つかす



ちやうどさういふ事だ
 星おおねは板おてた
 云へは、お殿とかく
 板の中にとりなの方へ
 公女は、その方へお
 たりやうと云ふの
 板をひきかけぬ
 まん中にな
 縮まるまの板の
 板をひきかけぬ
 公女は、その方へ
 たりやうと云ふの
 板をひきかけぬ
 まん中にな
 縮まるまの板の

一、いふける人といふ
 と人の心さうぞ
 一、他、仍^{やがて}状の四とる
 うさうぞ
 一、他の男けりつと
 るさうぞ
 一、男子の有さうぞ
 とさうぞ
 一、おとし人のさうぞ
 うさうにほつは
 うさうぞ
 一、へん、あつとれ
 わりのひの小刀と
 めをきる(うさうぞ)

る
なり



雲々



107

一、人の心をなやませ
 二、人の心をなやませ
 三、人の心をなやませ
 四、人の心をなやませ
 五、人の心をなやませ
 六、人の心をなやませ
 七、人の心をなやませ
 八、人の心をなやませ
 九、人の心をなやませ
 十、人の心をなやませ

四

金子正



印て封紙の中

[illegible]

あかきうはあまの
うらふ入へいこ
とびきりま
ちたおの意
く
酒のおもてみで
すんまじや
ス金のもてみ
うべつくる事
一橋ふく
ひめが
むさくもの
二橋ふく



通上 白銀 毛糸	及ね包や あんよ かき箔 一正	常陸 常陸包之図 一龍	浪子牧 一龍
-------------------------	------------------------------------	----------------------------	-------------------

常陸包之図 同裏之図

浪子牧

一はいふつこい
二はいふつこい
三はいふつこい
四はいふつこい
五はいふつこい
六はいふつこい
七はいふつこい
八はいふつこい
九はいふつこい
十はいふつこい



通上
白銀
毛糸

及ね包や
あんよ
かき箔
一正

常陸
常陸包之図
一龍

浪子牧
一龍

一はいふつこい
二はいふつこい
三はいふつこい
四はいふつこい
五はいふつこい
六はいふつこい
七はいふつこい
八はいふつこい
九はいふつこい
十はいふつこい

うゝなりあはばつ
 ついのほしをな
 きるす
 一せんふみんか
 とさうりきふく
 だうぶふてそそ
 大けいひこれほ
 トきま
 二地ねのきいゆ
 よかゞぞ家内こ
 る森くきぬ終
 うはわすれにさ
 ひとれもべり
 お膝はよくおめ
 べさる供時宜よ
 デス一ふんはむら

五二五



3

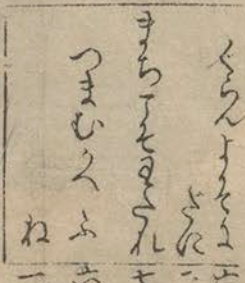


卷之五

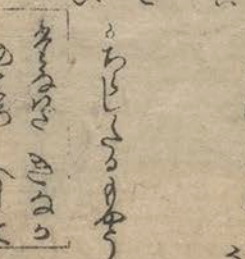
おとあつた



ら



男、こゝろひる人



經冊



經冊

たふ川乃 雲をよ

水の水

すくくや

な中勢

水は秋と

くうやト

いとふ

ふん



扇小物書は

あふふのそく

さくはれども

りやいこくま

くたのちのち

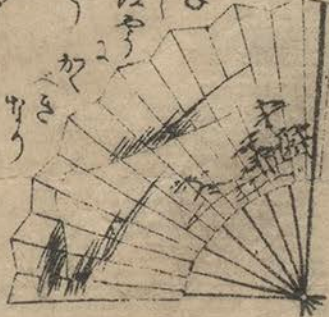
かたのちのち

かりのちのち

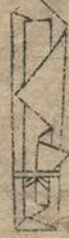
月ぞのとまる

おけを紙

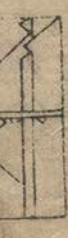
式はらし



おの花



中の花



香包



香包



正月 元日

年のしら

名け

新玉の

長とま

えて

我袖乃あり

うぐい

あれ

あふ

梅

え



正月

福寿茶

梅の花

梅の枝

梅の葉

梅の果

梅の皮

梅の骨

梅の髓

梅の精

梅の魂

梅の神

二月 初花

咲ほし

うはへ

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね



二月

初花

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

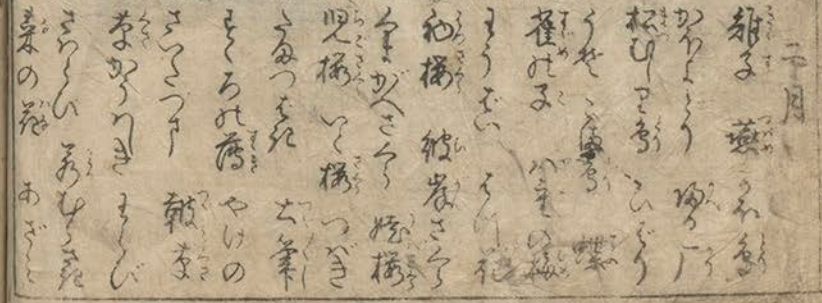
あうね

あうね

あうね

あうね

あうね



二月

初花

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね



二月

初花

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

あうね

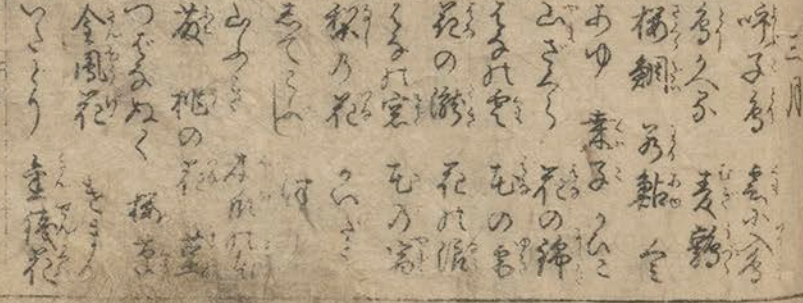
あうね

あうね

あうね

あうね

あうね



冬



六月 糸織

それとね

いふさ

ねれたいろ

移れたと

ねの

ねの



六月

蓮のつぼみ

美の花

海老

虎の尾の花

さくら

いかり

ねの

ねの

七月七夕

秋の萩乃

ねの

ねの

ねの



七月

ねの

ねの

ねの

ねの

ねの

ねの

ねの

ねの



十月

冬枯の

かきも

ゆき

浦の

秋を

内を

作を

かり

あり



十月

冬枯の

かきも

ゆき

浦の

秋を

内を

作を

かり

あり

あり

あり

あり

あり

詩經

清江の首に問の代乃女王王聖
の徳をそふへうはと帝の御后
た如とつん賢き姫君まうしくて
はゆひまうく家々の園内
有はくと作ううを我を
其詩水もいふて何の徳の
もまうくふふふふふふふ
是詩の本まうく我の徳もまうく



天智天皇

秋の田の

う徳乃

庵の

台と

あふ

我あふ

あふ



さうぞう

頼まれ

うさか

うさか

うさか

うさか

みくせと云ふに由後ありてその
聖の母やて女と云ふ下され
けつそまふこの一木と云ふ
梅と云ふけつと云ふ今梅と
云ふ梅と云ふと云ふ梅と
云ふ梅と云ふのゆりなりと
云ふ梅と云ふの梅と云ふ
年くは云ふ梅
人のく梅と云ふ

中納言家持

かきまの

梅

おの

おの

おの

おの



安陸仲磨

天のり

ふりさけ

ふりさけ

ふりさけ

ふりさけ

ふりさけ



人あつてかきつけまゝいへるや
 ぢふさるかゝとけひつひめい
 少しより刀をさしき地獄なる
 とけをばねうらゐて
 死にうけ人もさうさうや
 とさうれを和南にきまにや
 てそのうけに二ふさで女すあ
 へりゆひさるとうや近き世
 本井ト巻としてかきさるに
 昨のあさうはあれまゝそあ
 そいあふ耐の機弁

小あま

ちどりか

とくさう

きやう

あう

きやう

僧正遍昭

お生
 とは風雪

かよひち

吹とら

よ

乙女れとく

あけとく



湯成院

ほぐれ

きよ

かつ

これ乃

川

あつとけ

測とあ



河川の依園といふところの
 てるん位ける老嫗をさうけ
 ぶそのいさへあへるをさう
 上河川のやうかほつひん
 づらうてみさあひすあ
 いとけ後なりまゐりあ
 岸よりまゐりまゐりあ
 候あつとけをさうけ
 傍とけとけをさうけ

[illegible]

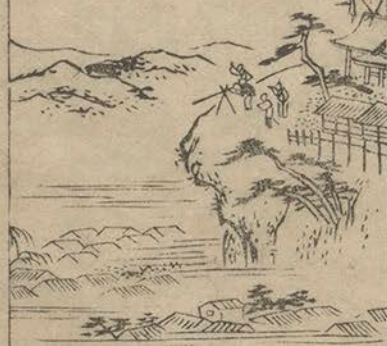
神工實^ニ此の韓を遷^ス彼^ニは
必くと巡^ル得ぬの標^ハ必^ズに至^リ
んて後者の如^クなりとのみい
ふもの所を信^ジるといへる言
底の事と万葉集には事ある荒
人^ノ針^ヲと稱^スう^レ足^ヲ踏^ミり木^ノ敷^キを
せよと云^フ針^ヲより^テ木^ノ敷^キの^二い^ハけ^一
し時帝の如^ク差^シて明^ニ神あり^ト思^ハた
まひて



か
く
る
な
か
ふ
は

夜やこいさ家や落さめそそ
 ぬたわいのほよりおちくち
 とほしくさけお小帝おちくち
 せめいきてえき居をわくふさう
 らせめいそそれう時代うそ
 文徳天皇のうけ信者おちくち
 ありまき平朝臣供奉いきて
 みてなる
 我々もくもくくもくねい
 こいね松身世代おちくち
 何ん明神おちくちをほめ
 けいもくとる
 あくじやおちくち
 へきせしおちくち
 そのかりおちくちのありなるま
 言ふにもおちくち

夜系紋の初は
 伯のえれ
 きうふよる
 らる
 んや
 夏乃のむら
 人ちよくらん

夜やこいさ家や落さめそそ
 ぬたわいのほよりおちくち
 とほしくさけお小帝おちくち
 せめいきてえき居をわくふさう
 らせめいそそれう時代うそ
 文徳天皇のうけ信者おちくち
 ありまき平朝臣供奉いきて
 みてなる
 我々もくもくくもくねい
 こいね松身世代おちくち
 何ん明神おちくちをほめ
 けいもくとる
 あくじやおちくち
 へきせしおちくち
 そのかりおちくちのありなるま
 言ふにもおちくち

夜系紋の初は
 伯のえれ
 きうふよる
 らる
 んや
 夏乃のむら
 人ちよくらん



あゝはくくあひきりんとせ
 せとめてやう月でやうけ
 るに磯かきやうと男いねる
 けうこの女とほるがてんあか
 是の女多の事うらちい
 出後ふすむとていきて
 きはひやうはつみ秋の夜に
 ういしてさふきおひのり
 させてさうせふつその包紙
 ぶたのうらにのけいと洗
 かへさるる
 ころくのたへ
 舟米の風を
 多ふのときけ
 とよみていさうらぬを
 海をさるるうらうら

源宗平朝臣
 山は
 みる
 さい
 海さうなる
 人をも尊む
 かわぬと人へ



九河内躬恒
 初霜れ
 白きくの花



へりけるおれはたふり
 娘の女れ何やんはすうとやハ
 ちいさく三河の天をまこね
 田をうりあつておつては
 梅をさうさういやうきさぬ
 ふも何とてさうくもあつたか
 入トあひはつたは丁ちを
 せうきしはるのさむ村とをり
 名をわくの婢の女とをさふ
 さへうくさびやうさふの
 りやとてさうくさふはゆり
 いさそそ名わしにさふあひ
 けりてさうはさふあひ
 まあつてはつたつたさける果
 何れ何れ妻とさふもあつた
 いでさうさふさふさふさふ
 人のかさうさふさふ

亡生忠
 有乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃



武田勝頼甲斐國の本城を包圍せし
 長子勝頼は母の命をうけつて
 けりてさうはさふあひ
 まあつてはつたつたさける果
 何れ何れ妻とさふもあつた
 いでさうさふさふさふさふ
 人のかさうさふさふ



坂上足則
 有乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃
 是乃



び見むひうの母のむすめ
 とれ乃ちくあるくとうけう
 はまうやうきふもあう
 るがえ入ふみむねとく
 ゐういふのすう

かゝる人々を帝音花とて使
まじりて帝座その代りたる
うつくしき鏡を拝みて并
まじりて母乃すくごんまとい
さへををくごんよりてその玉を
掘撲乃國といひてさへをくごん
の玉のやうな神の玉とて神
のやうな玉とてさへをくごん
まじりて神の玉とてさへをく
ごんといひたる玉なり

誰か

壽

卷八

る砂乃

すけ

ひみそに



紀實之

Y⁵² 52

知
子

卷之五

るゝ
たそひうの

素白心竹



長き小社より下縁のうら
 矢張りつゝ何とぞ申すか
 妻の養ふもつとてさうなれ
 まゝなれどもお記念のいふ
 かはあてゝさうと後小社
 ちやうどてんやうとさう
 入まへ小社の後よりちや
 隣人の世ある時様で
 うれよりまゝお申す
 ぼくはこれお申す
 現にさうしてほく小社のつま
 備えすかきをのそめ
 さえある人さうなれ
 しかつちその小社に
 ぬきとさうさう刀で
 狗りてはさうとぬき
 じやうとさうとさう

平兵衛
 志のふれ
 出た
 我
 おや
 人のふれ



志のふれ
 志のふれ
 志のふれ
 志のふれ
 志のふれ



志のふれ
 志のふれ
 志のふれ
 志のふれ
 志のふれ



あらうまておきりふさぎ月
 ひくまよおひきりつ後の現
 色にききりつ後の現
 まる親りける様をききり
 ておのまのききり
 おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを
 とらうすききりけをききり
 おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを
 おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを
 おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを

有末義孝
 君のききり
 命は人
 なききり
 あいさるうれ




おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを
 おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを
 おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを
 おの月おつものききりけを
 ききりけをききりけを

有末義孝
 君のききり
 命は人
 なききり
 あいさるうれ



下階はあさねを待てぬはるの
 ちひさしきうらなれはるなり
 とらけりおれはつきてはるなり
 ぬはれとてはるなりはるなり
 かへまきおれはるなりはるなり
 そも又おれはるなりはるなり
 ともまの老けりおれはるなり
 君もぬをまきおれはるなり
 家時義定つておれはるなり
 かへまきおれはるなり

まのぬをまきおれはるなり
 ともまの老けりおれはるなり
 君もぬをまきおれはるなり
 家時義定つておれはるなり
 かへまきおれはるなり

家時義定
 あふとらん

家時義定

あふとらん

あふとらん

あふとらん

あふとらん

あふとらん

あふとらん



ひうはるの果てはるなり
 ともまの老けりおれはるなり
 君もぬをまきおれはるなり
 家時義定つておれはるなり
 かへまきおれはるなり

あふとらん

あふとらん

あふとらん

あふとらん

あふとらん

あふとらん

あふとらん



綿本と云うは、是れ、
 二つあるに、ついでともあり、今
 事なく、ついでともあり、
 其れを、
 て、
 入る、
 の、
 綿本、
 きの、
 と、
 く、
 あり、
 へ、
 又、
 幾、

儀同三司

切要

去冬

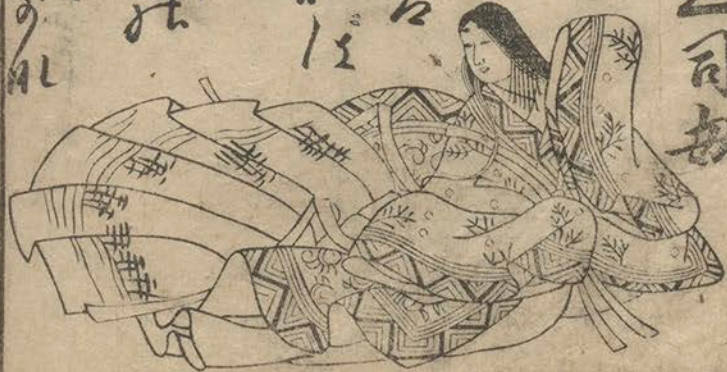
也
乃
以

李氏

也

命

700
742



大納言公任

乃者ハ

卷之七

冬

な

如左



名々々々々々

松箋

かへる事のあはれきこえ
 人くみしりなり興しきいて
 とめはしらけりあてあぬうけ
 是は焼くそあまき風をる
 終人乃梅もさうね橋の都
 といもきき人く目とる金せ
 てまふくけいあふけききあて
 見へけり中にもねきききき
 けりいさうきききききき
 うへあきさきききききき
 あまけり焼くけりいさうね
 つきそいさは結きききき
 けりきききききききき

和泉式部
 けり
 の世れ
 けり
 けり
 けり
 けり




紫式部
 けり
 けり
 けり
 けり
 けり



けり其家につをうとある
 年々葉をひきふとをうと
 その雄人のあに殺されてけり
 かくて又その雄をかきとて一羽の
 たりとせられんをうとをうと
 夫にうとて二羽とせり一羽の
 けりとせりとせりとせり
 ありとせりとせりとせり
 是れ秋とせりとせり
 ういれとせりとせり
 年々雄とせりとせり
 ういれとせりとせり
 けり

一はとせりとせり
 ありとせり
 ありとせり
 ありとせり

清少納言

夜とありて

るれ

るる

はるる

ふあふ

雲とありて



お京より道雅

今へと

ふいふ

なん

うらふ

人ほくおと

ふふふ



[illegible]

新木た近へ、三州松江の衆士大
 たをう妻へはく、おのふもきき
 蕃う始ふ人の言ありけり、いふ
 くもいふをばうとてうやに
 あるを、いふおのふとてうやに
 下に始ふ
 春鹿しらねも其の
 めきみよりうやのけり

すゝめのみこ
 国路は
 春れぬ
 夢は
 なる
 心は
 心は
 心は
 心は

[illegible]

三條院

あふふ

あ

人

三

三才

書
此
月
の
如



結固しき師

嵐あらしの

三
字

乙卯

もみぢ茶



多分此川の

錦
なり



うつてかきぬ遊くけて一人と
ていふにあせういふ女と一十六
斗ふがこころがう下痛とを
なくゆさく美かりあまは
ててあうとせたまひたねは
おのれは居うとを及へたを
はふの縁を一かきみたぐういふ
とくあまを

ひさしの雲

ういぎも
何^{なん}う
えん

かづのゝとら

あつた
あつた
あつた
あつた

ちやてぬーれいせけまのた
 ちうを色はうてあひきみ
 れが知ーいのほう乃を
 都へつてぬぬみてそとく
 かはるるるるるるるるるる

あへ 倅^{せう}けふとや

良暹法師

卷之六

宿紙令

出

地

7

秋の

一



大相言經信

史記

門田

多

14



あゝふふふふ

秋
露
飛
雪



中ういふ所の積いゆゑをいふ
 若くは同じく同じく同じく
 二つをいふとすゝめをいふ
 海へいふとすゝめをいふ
 りあはれをいふとすゝめをいふ
 すゝめをいふとすゝめをいふ
 中ういふ所の積いゆゑをいふ

[illegible]

南海

左京左京

秋風

五ノ

の

冬
海

月夜記

加

新志
さやあさ

なる様とてうばと系の子と
 とおのちうし監が形勢の怖と
 争つてさううやうとありたり
 めのとどて監にわたりて零とあき
 づふとそやうとあり
 煮ゆかぬがやまうとあり
 か足の絆をうけてたのまん
 ををうけてとみを監に
 ぞとてうしとあり
 ひととそつとありたのまん
 くの絆をつととあり
 かくして卯月十日にむつとあり
 うづるととありて監に肥後へ
 けりて監にわたりてとあり
 その夜お満とありとありて
 ぞとてうしとあり

西行法師
 なま
 月やりのを
 けり
 かくら
 けり
 けり



肥後
 の軍に討たれり
 時婦子肥後へ
 けりて監にわたりてとあり
 ぞとてうしとあり
 かくして卯月十日にむつとあり
 うづるととありて監に肥後へ
 けりて監にわたりてとあり
 その夜お満とありとありて
 ぞとてうしとあり



寂蓮法師
 ひととありて
 けり
 枯の葉
 雲多し
 秋の夕暮





二條院御後

我袖

ちい

そね

沖の石乃

人

かきま

なり

此の世に生るるもの
 一は命の長きこと
 二は位の高きこと
 三は財の多きこと
 四は徳の厚きこと
 五は名の高きこと
 六は才の高きこと
 七は力の高きこと
 八は智の高きこと
 九は徳の高きこと
 十は名の高きこと
 十一は才の高きこと
 十二は力の高きこと
 十三は智の高きこと
 十四は徳の高きこと
 十五は名の高きこと
 十六は才の高きこと
 十七は力の高きこと
 十八は智の高きこと
 十九は徳の高きこと
 二十は名の高きこと



鎌倉太左衛門

世中

はひ

か

お

渚

雲小

はるてり解

[illegible]

